

ずいそう



子供達との剣道

宮 岡 諭

近所の子供達と一緒に剣道の稽古を始めて30年近くになる。

会社勤めの身では週に3回の稽古は出張や時間の都合がつかないこともあり、他の先生方にご迷惑をかけることが多いが、自宅と職場と道場（小学校の体育館）がそれぞれ車で5分以内の場所にあることで何とか続けることができています。

私が剣道を始めた動機は初めてこのクラブが発足した時に娘と一緒に稽古を始めたことであるが、今はその先生の弟子としてボランティアと一緒に子供達を教えている。

他に週に一回、大人だけで先生に教えて頂いているが、この歳になると両親も他界して、何かと注意してくれる人は回りからいなくなってしまうが、先生との稽古で指導して頂くことは、日頃忘れかけている自分の謙虚さを指摘されているようで大変良い勉強になっている。

少年剣士は孫のような幼稚園児から中学生まで30人程であるが、子供と一緒に稽古をしていると感動させられることが多い。

まず子供達の目が綺麗で見ていると心が洗われることである。また稽古の始めと終わりには正座しての黙想があるが、特に小さな子供達のその姿を見ていると、まるで仏像が座って居られるのではないかと思う時さえある。

また小学校一、二年生になると対外試合に連れ出すようになるが、この初めての試合がまた大変である。

自分の試合の順番が少しずつ近くなり、待っている間の子供の緊張感には大変なものがあるが、足がガタガタと音を立てて震えているのが伝わってくる。

試合は10メートル前後の四角いコートに、1人で出て行き相手と勝負をつけて帰ってこなければ終わらないのであるが、日頃は家族に甘えている小さな子供が、このような厳しい体験をすることは通常では少ないことではないかと思っている。

そのような子供も勝って戻ってくる時のその面の中に嬉しそうな顔がある反面、負けた時には試合が終わっても悔し泣きをして面をなかなか取らずにいる顔を見る時、こちらまで目頭が熱くなってしまう。勝負だから、勝つ者がいれば必ず負ける者がいることになるが、その勝敗の中で子供達が何を感じ取るかが大切だと思っており、その体験を積み重ねて行く中で、少しずつ精神的に強い子供に育って行って欲しいと願っている。

子供達の中には生まれつき運動能力のある子供と、そうでない子供がいるのは仕方ないことですが、最後に強くなるのは運動能力はそれほどではなくてもコツコツと稽古を休まずに続ける子供が年を重ねるにつれて強くなる。

これは大人の世界でも同じようなことが言えると思うが、何事にかけても諦めずに粘り強く続ける努力に勝るものはないようである。

創立以来続いている夏の早朝稽古と冬の寒稽古も今ではクラブの名物となっているが、朝6時前からの五日間の稽古は最近の若い親にとっても辛いようであるが、これだけは止めないことにしている。それは、これをやると子供達が目に見えて逞しくなるのを毎年見てきているからであるが、特に寒稽古は子供達にとっては未だ暗くて眠く、時には雪が降る中を起きて来るだけでも厳しいものがある。

少し早く行き、やってくる子供達に声をかけるようにしているが、一人一人の顔を見ればその朝の様子がよく分かる。

愚図ったのか、まだ少し目に涙が残っている子供もいたりするが、そんな子も稽古を始めると何事も無かったかのように元気になる。

冷たい床での正座、素足での稽古は見ている間に子供達の足先が赤くなってくるのが分かるが、それを我慢して大きな声を出して一生懸命稽古をする姿には見えて感動させられる。

父兄には「剣道を通して身体の丈夫な粘り強く我慢強い子供に育てましょう」と機会ある度に話をしている。

全日本剣道連盟では、剣道の理念を「剣の理法の修練による人間形成の道である」と制定されており、高段者になられるほど人格者が多く感銘させられることが多いが、我々凡人にはこの道を極めることは難しく、一生のテーマだと思っている。